

## 期待以上の出来に盛り上がった 《ドン・バスカアーレ》

チューリヒ歌劇場前広場ゼクスロイテン  
プラッツがクリスマス・マーケットの人混  
みで熱を帯びていた12月8日の日曜日、歌  
劇場のなかでも、ドニゼッティ《ドン・バ  
スカアーレ》初日終演後は負けずに熱く盛  
り上がっていた。クリストフ・ロイの演出  
に期待がふくらんだのだが、さらにそれを  
大きく上回ったものだったからだろう。細  
部まで読み込んだ解釈で、強引な展開部  
も現代的な理由を与え、納得させる仕上  
りとなり、それを実現させるキャストにも  
恵まれた。

題名役のヨハネス・マルティン・クレ  
ンツレは、純ドイツの名前に反してイタリ  
アの発声法を獲得しており、出すぎない  
演技で押しつけない笑いを取る。そして最  
初のアリアで観客を完全に掌握した。ノー  
リーナのジュリー・フックスは、現在のこ  
の演出は成功しなかっただろう。登場の  
アリアからすでに、今宵の成功を決定づけ  
ていた。エルネストのミンギー・レイは終  
幕のノーリーナとの二重唱を完璧に歌い、マ  
ラテスタのコンスタンティン・シユシヤコ  
フもイタリア人顔負けの達者な超速歌いに  
驚かされた。指揮のエンリケ・マツツオー  
ラは真面目に細部まで光らせ、真面目すぎ  
て、コケットや踊り出したくなるような高  
揚感が不足している部分以外は、アクセ  
ントを効果的に使って牽引力を最後まで保  
つた。

このところ集客数が上がっているとい  
うリサイタルにも、12月5日にはクラッシ  
ミラ・ストヤノヴァが登場し、ラフマニノフ

の歌曲で最初から100パーセントの職人  
技を聴かせた。アンネリー・レネルツ奏  
でるハーブとのデュオは興味深い試みだ  
が、続くR・シユトラウス「4つの最後の  
歌」は、なぜか説得力に欠けた。

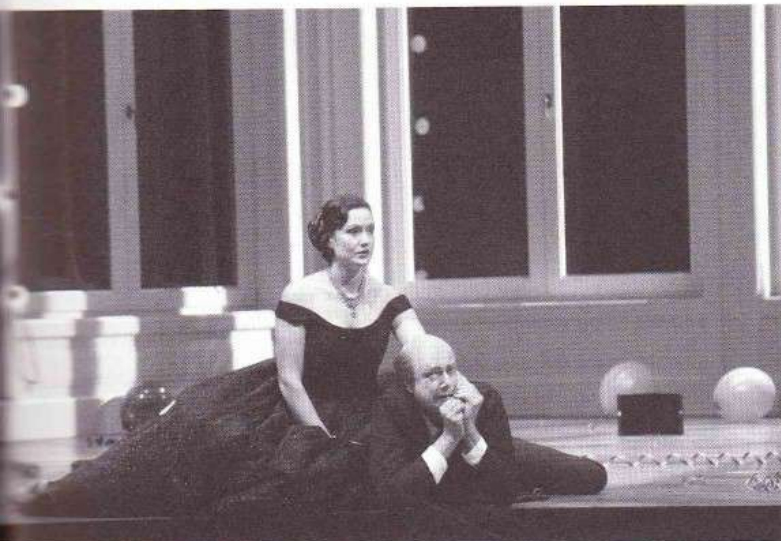
後半はチャイコフスキー《エフゲニー・  
オネーギン》の主題による幻想曲で会場を  
ロシアの風が包んだのに、《手紙のアリア》  
は予告なしにカットされ残念だった。ドヴ  
オルジャーク《ルサルカ》のアリア、チレア  
《アドリアーナ・ルクヴール》のアリアの  
2曲は静かな長いレガートに欠けたが、今  
宵のクライマックスは、突然挿入されたウ  
エルデイ《オテロ》の《柳の歌》と《アヴェ・  
マリア》だった。イタリア語の母音が不適  
切な箇所がいくつかあったが音楽的には完  
璧で、最低限の演技しかしていないのに心  
に迫る。最後は《運命の力》のアリアだった

が、ここでは重いフレージングがこなせな  
いハーブの限界を見せつけられた。彼女の  
歌唱力・演技力がなければ、ハーブの伴奏  
でオペラを歌うのは難しかっただろう。

## 活気を帯びるトーンハレ

11月23日にアロンドラ・デ・ラ・ハー  
ラの指揮で聴いたチューリヒ・トーンハレ  
管弦楽団のスペイン・プログラムほど、理  
屈抜きで熱く湧いたトーンハレを初めて見  
た。パブロ・サインス・ピエガスをソリス  
トに迎え、ホアキン・ロドリゴ《アラ  
ンフエス協奏曲》を、最高のロマンティシズ  
ムで披露した。休憩の後はマヌエル・デ・  
ファリヤ「バレエ音楽《三角帽子》」で、踊  
るような曲想が彼女の指揮によって実現さ  
れた。

続いて25日はパトリツィア・コパチンス



チューリヒ歌劇場《ドン・バスカアーレ》から。ノーリーナを歌ったフックス(左)  
とドン・バスカアーレを歌ったクレンツレ(右) ©Monika Rittershaus

カヤとニコラス・ゲルバー  
のチャリテイ・コンサート  
に心を打たれた。コパチン  
スカヤの発案で、以前デュ  
オを組んでいたピアニスト  
で現在は小児癌専門医であ  
るゲルバーを、研究費を集  
めるため15年ぶりに舞台へ  
誘ったのだという。モーツ  
アルト「ヴァイオリン・ソナ  
タ」K14では純粋に「共に奏  
でる幸福感」がにじみ、涙を  
誘った。シユーマン「ヴァイ  
オリン・ソナタ第2番」もロ  
マンティックな出来上がり  
だった。休憩後は武蔵徹《妖  
精の距離》で会場を静けさ  
が包み込んだあと、ラヴェ  
ル《ツイガース》にすべての

情熱を注いだ。大人の癌に比べて症例が少  
なく、薬剤開発も遅れているという小児癌  
への支援は、チューリヒ・エレオノーレ財  
団 小児病院で無期限に受け付けている。

Kinderspital Zürich-Eleonorenstiftung  
Steinwiesstrasse 75, 8032 Zürich  
Spendenkonto: 87-51900-2 IBAN: CH  
690900 0000 8705 1900 2

## エキサイティングな ブニアティシヴィリ姉妹

12月16日にはカティア&グヴァンスタ  
のブニアティシヴィリ姉妹のピアノ連弾コ  
ンサートで、いつもと違った客層がトーン  
ハレを熱く盛り上げていた。ラフマニノフ  
「組曲第2番」は、シユーベルト「幻想曲」  
に変更されたが、シユーベルトのCDを掲  
げてコンサートツアーを行ってきたカティ  
アには合っていた。シユーベルトへの深い  
洞察と、それを現代女性の味つけで弾き飛  
ばす爽快感は姉のグヴァンスタも同じだ。  
そしてその後演奏されたダリウス・ミヨ  
ー《スカラムーシユ》でも、姉妹共通である  
弱音の透明感を聴かせ、楽しそうに弾き切  
った。リスト《ハンガリー狂詩曲第2番》は  
カティア一人でも十分エキサイティングに  
聴かせるが、連弾になるとそのパワーは倍  
以上になり、譜めくりも間違えるほどのス  
ピードとフレキシブルさが炸裂した。ガー  
シユウイン《ボーギーとベス》「幻想曲」で  
は、サクソフォーンの音が聴こえるような  
色合いを帯び、ラヴェル《ラ・ヴァルス》で  
はその熱さは絶頂に達し、弾きながら立ち  
上がったりのして、姉妹でなければできな  
いほどの丁々発止が小気味よかった。アン  
コールにピアノラを聴けたのはポーナスの  
ような喜びだった。